
一部50円です

全身麻酔

人生で初めて全身麻酔をした。それについて私は非常に興味を持って楽しみにしていた。よく理解は出来ないが、無意識の状態になるわけだから死ぬ時と似ている、と単純に考えたのである。その瞬間を出来るだけ鮮明に記憶し「芥川だより」に書かねばならない。その思いを持って手術台に上がった。麻酔医が二人、手術着を着た美人の主治医ら三名の医師たちが手術台に寝ている私を取り囲む。すぐに麻酔医が「やりますよ」と言いながら吸入マスクを口に押し付けた。点滴からも麻酔液が入っていたのか、あっという間もなく麻酔が効いた。ほんの数秒間の意識しか記憶にない。地平線のようなものが少し見え、次に何が見えるのか期待していたが全く何もみえず何も感じない無の世界になったのだ。

また、数分も経ってないように思えた時に「大丈夫ですか？」と問いかける主治医の声で意識が戻った。すでに一時間が過ぎて手術は終わっていた。その瞬間、もう終わったのか。しまった！何も見えなかった事を悔やんだ。想像していたような幻覚や痛みは少しもなく無事終了していた。

その経験から私は、死にいく時も同じだろう、と単純に考えたのである。何か味気ない気もするが、すうーっと消えて何も感じない世界になってしまうのだと。あの世はあるか、ないかの迷いは消えた。何も無いのだ。この世に生きているうちが花で思う存分楽しまなければ、と思うようになった。

余談であるが、担当の医師は我が娘のような若くてかわいい小柄な女医である。私は、こんなかわいらしい医師がいるのか、と疑った。問診のやり取りもやさしく、目線も低く威圧感がない。彼女は、CT画像をみながら、「よくある症状です。手術しましょうか。全身麻酔で内視鏡手術を行いますから痛くはないです」と言った。中年の医者だったら即答は避け「家族の者とも相談して考えます」くらいに言って手術を延ばす算段をしたにちがいないが、あまりの可愛らしさにほだされて、とっさに「はい」と返事してしまった。詳しく手術の事も聞かず彼女の愛くるしさにひかれて答えてしまったのだ。美人に弱い自分に呆れながら…

おかげで入院生活もとても楽しいものとなったのはいうまでもない。(嘉)

連載 爺捨て山 32

梵店主

知り合いの店主が、淡路・神戸大震災を振り返って人間の強欲と無責任さを語る。彼は、東灘で被災し近所の養護学校に避難した。自宅のマンションは軽度の損傷であったが、近くの知人の勧めもあり避難したのである。店舗での営業が出来ず仕事が無かったこともあり、自然に避難場所のリーダーのような役回りになってしまい不眠不休で五百人の世話をすることになった。事情を知らない周りの人は、彼を公務員だと勘違いして不満や苦情をぶつけてくる。警察や消防、市役所などの人も当然のように彼を使う。

印象的だった作業に、トイレ掃除があった。水道が使えずトイレが使用出来なかったため、学校の教頭を何とか口説きプールの水を利用することにして、各階に沢山あるトイレを六階すべて毎日、一日中水汲みと掃除に一週間一人でやった。

安否確認で夜中に訪れる人の対応や救急患者など二十四時間動いている。そうして数ヶ月間ボランティアに明け暮れた彼が、「もう二度と、あんな事はせん。誰一人、ありがとう、の言葉を言わなかった。一言でも言ってくれたらなあ」とぼやく。

人は災害の時ほど目先の欲得で動き、被害者面になってしまうが、一言「ありがとう」は言いたいものだ。

大阪府の片隅で、ひっそりと肺ガン治療中の夫に寄り添う専業主婦。それが、私の姉ちゃんなのだが、そんな主婦の身にも、日本が抱える問題は容赦なく降り注ぐ。で、それは結構、深刻な問題なのだ。だが、一体、どういうことであろうか、

姉が口にする他突然、それは漫才のネタか何かのように聞こえるのだ。

まず、年金。姉は、60歳になったとき、6万某の年金を受け取れることになった。「やった！小遣いになるがなと思いましたがね、でも、それは毎月ではなく、年間の金額やってん」。1カ月にしたら

「私の携帯の電話代にもなれへんぐらいやねん」。ガンでも何でも、姉には夫がいるから、ご飯は食べられるけど、その金額、ちよつとひどくはないか。

だが、姉は「まあ、もらわんよりマシやろ」とケロケロと笑っている。『1カ月の間違いじゃないんですか』とよっぽど社会保険庁に言うたるか、思ったけどな、こんなご時世やろ、言うてもムダやろ」。

義兄は病氣療養で休職中だが、健康保険や年金、介護保険などの支払いが毎月9万円を超すらしい。「病氣になる前は、この2倍やってんけど、それでも高いやろ。『もう少し下げするように、会社に交渉したら？』って隣のシライ(名字の呼び

捨て、隣家の奥さんだ)に言われたけど、下手なこと言うて、『あ！そんな社員がおったわ！退職してもらわな』とか言われたらアカンから、黙つとくことにしてん(笑)」。余計なことを言つて、やぶへびになつてはいけない、というわけだ。

義兄の厚生年金。これは、姉たちの老後の生活を支える、貴重なお金だが、「(年下の夫だから)65歳になるまで、もらわれへん時代やんか。そんな先の話じゃ(義兄は)生きてへんかもしれへん、ほんなら、もらえないじゃけん」って、いいの、姉さん？「だって、私が半額もらえるやろ(笑)」。

ったく。義兄の会社のことも、姉が話すと、私はおかしくて吹き出してしまふ。発病以来、ずつとこうだったから、今に始まったことではないが、義兄は2年前から、一日も仕事をせず、会社からも何も言われず、「何にも通知もけえへんし、しくんと

相談しようにも、給与計算なんかは海外にアウトソーシングしてるし、相談する人もおれへんしな」。義兄が、相談すべき相手を知らないわけないやろ、サラーマンやつてんから、と妹は思う。それに、特定の相手が仮に不明でも、まともな主婦、一般的ご夫婦なら、とにかく会社に挨拶や病状の報告に行くと思うが、姉夫

婦は、何も言われないのをいいことに、病院の診断書だけ会社に送つて、あとは知らん顔。それをもう2年間も続けている。中

小企業なら許されない犯罪行為だが、幸い、外資系大企業。病氣になった社員を見捨てた、とあつてはコンプライアンスとやらの反するので、温存してもらえてるのだ、多分。

それとも、ガンという病氣なので、やせ衰え、寝たり起きたりの生活を続けている、と思われていて、「あそこは、奥さんも専業主婦やし、余命いくばくもない病人が退職勧告されて、がっくりきてしまつても酷だ。どうせ定年前だし、ゆつくりさせてやろう」と思つてくれてい

る誰かが会社にいるのかもしれないが、「アハハハ、そんなヒトおつたら、一遍ぐらい様子見に来てくれるんちゃう？」と姉はドライだ。

「隣のシライの旦那は65歳で定年退職しはつてんけど、4月1日に辞めるよ、3月31日に辞めた方が、健康保険はトクなんですよ、とか会社の人がいろいろ教えてくれたらしいわ。『シライさん、ああですよ、こうですよ』って。うちには誰も何にも教えてくれないって、

人気がないにもホドがあるわな」と、姉はキャハハと我が夫のことを笑っているが、原因は半分以上、姉にあるような気がする。ただ、姉は「命よりカネ」というタイプでないことだけは確かだ。「それだけ元氣やつたら、会社に行けるん違う？」などと言つて、義兄を駆り立てるような

ことはしない。「チョロチョロ行つたら、余計に会社に迷惑やろ」と手前勝手な推測をして、義兄には「会社なんか行つたら、すぐ、再発するぞ」とひたすら、食養生に励ませ、相変わらず、バカ高いローヤルゼリーだのプロポリスだのを買

い続けている。義兄は定年になれば、収入もとだえし、「そろそろ、ローヤルゼリーはいよいよ」とか言つてるらしいが、姉は「再発したら、もつとお金、かかんねんで」と微動だにしない。

その義兄の定年は60歳の誕生日を迎える来年2月。「会社にマトモに行つてたら、もう2、3年、この仕事しませるか、つていうのはあつたかもしれへんけど、今でさえ、定年してると同じやねんから」と姉はサバサバと言う。収入のことを考えたら、サバサバしてられない気がするが、妹と違って姉はそういうと

か、つていうのはあつたかもしれへんけど、今でさえ、定年してると同じやねんから」と姉はサバサバと言う。収入のことを考えたら、サバサバしてられない気がするが、妹と違って姉はそういうと



ころ、キモが座っている。「何とかなるやろく。へっへっへっ」と笑っている。不思議だが、そんな姉と話していると、「なる、なる！ 何とかなる！」と思えてくる。

逆は、良識派の母だ。「金の切れ目が縁の切れ目って、昔の人は言うたもんよ。お給料が入らなくなって、あの子（我が娘。姉のことだ）が〇〇さん（義兄）と

別れるとか言い出さないか、お母さんはそれを心配する」などと言う。そう言われると、まさかそれはないよ、お母さんと言いつつ、「ひよつとしたら……」と心配になる。まったく、いい加減な妹である。芯がない、と自分でも思う。

その芯の強い姉から、電話がかかってきた。国が隠している重大な秘密を、妹であるアンタにだけ言う。だから、警戒しろ！ ま、そんな電話だったのだが、情報の発信源は、義兄の幼なじみの「ナオちゃん」。子供時代のままの呼び方だが、もちろん、義兄と同じ年のおっさん

だ。義兄の実家のある福島県のいわきで生活しているが、そのナオちゃんが、大阪にいる弟のところに来て、義兄や姉にも会って、こんな話をしたらしい。「もう、福島には住めねえかもしんない。放射線量が、いつまで経っても、減らねえだもん」。ナオちゃんは東日本大震災の直後に、弟の家に、奥さんと子供たちを疎開させ、自分は商売をしているので、いわきに残っているが、「呼び戻す気になんねえ。生活が出来るなら、自分もこちらに来たい」。そして、国は、放射能被害のこ

とを隠していて、実態はかなり危険なことになってきているみたいだ、とも言ったらしい。

それを聞いた姉は、「アンタ、東北に仕事に行ってるやろ。必ず、マスク持って行きや。正義感ぶって、放射能汚染地域の野菜を買ってると思うけど、しばらくの様子を見いや」。健康オタクの姉が、そんなことをしていたとは知らなかった。私は、申し訳ないが敢えては買っていない。



姉は「だって、〇〇（義兄）と一緒に買い物に行ってるから、『ほら、〇〇の故郷のキュウリ買ったよとか、桃買ったよ』って言うたら喜ぶねんやんか」。姉がそんな気づかいをしていたとは知らなかった。「アンタは離れて暮らしていて、それないねんから、無理に買いな！」。しかし、姉さん！そういうのを風評被害というのではないだろうか。（A O）

地名とイメージ

大江雉兎（おおえちゅと）

世の中には「絵はがき」というものがある。観光地と呼ばれている場所によく売られているものだ。そこを訪れた人が、旅の記念に買って旅先から便りをしたためる、あるいはその場所を訪れたことのない人へのお土産として……などが本来の使い方だったようだ。

写真付きはがきが「絵はがき」になるには条件がある。それは、写真を一瞥しただけで、それがどこであるかが分からねばならない、ということだ。京都の絵はがきなら、清水寺の本堂舞台や金閣寺の舍利殿を撮ったものが京都らしい絵はがきだし、イタリヤの絵はがきなら、ピサの斜塔かコロッセウムあたりが写っていないければならない。観光地を撮っただけでは、「絵はがき」ではないということがある。土地には多かれ少なかれイメージが付着する。人気の観光地には、その魅力アピールするイメージがあり、それを目に見える形で、かつ分かりやすく表現したものが「絵はがき」なのである。

現代社会では、一番分かりやすいのが「絵はがき」かと思つて、そこから始めたのだが、写真など視覚に訴えるツールが発達していなかった時代ならどうだろう。土地や空間に付着するイメージは存在しなかったのか。そうではない。写真はなくとも、絵画があつた。現代の「絵はがき」同様、どこか遠い土地を描いた古い時代の絵画は、その土地と分かる特徴を強調した。実際の景観と一致するか否かではない。むしろイメージの増幅、デフォルメもあつたに違いない。芭蕉が『奥の細道』の旅で松島を訪れた際、口をついて生まれるはずの五七五が出てこなかったのは有名な話だが、それでも松島の眺めを文章に書きとどめるに先立って「抑も松嶋は扶桑第一の好風にしてをよそ洞庭・西湖に恥ず」と記している。中国の洞庭湖や西湖を引きあいに出しているのは、まだ見ぬ松島を、名勝地として名高い洞庭湖や西湖と重ねていたからだろう。イメージ裡で語られる松島は、日本の洞庭湖や西湖といった認識だったのである。

こうしたイメージの次元で語られる景観は、時代が下がると現実にならなくなる。実見の機会が増え、情報量が多くなつたからだろう。芭蕉の時代、松島は洞庭湖や西湖のイメージだったが、

ドイツ時代⑤（70年12月―75年5月）

土田 裕

アイスランド

室町や鎌倉、あるいは平安時代までさかのぼるとどうだろう。実際の景色から乖離した単純なイメージに偏重していたのは想像に難くない。松島の流れに即するならば、古い時代には、塩竈を取りあげるのがいい。古くから「塩竈」と呼ばれてきた景観には松島も含まれ、現代の地図のように松島と塩竈は区別されていなかったからである。

あの籬の島の森の梢に、鳥の宿して轉りて、柴門に映る月影までも、古秋に返る身の上かと……とは、謡曲「融」の一節。旅僧が幻視する塩竈の景が言葉の世界に再現されている。さらに時代をまき戻せば、よく和歌の素材になるのは、潮焚く海人の煙であり、沖行く海人の小舟である。これらは「塩竈」という言葉と、ほとんど一對一の関係で結びついていた。この塩竈のように、固定的なイメージが付着した地名は、好んで和歌に用いられてきた。「歌枕」と呼ばれる一群の言葉である。

ようやく本論が近づいてきた感もあるが、あいにく紙幅も尽きたようだ。ミニコミ紙「芥川だより」に寄稿するにあたって、地名としての芥川を取りあげる心づもりである。この「芥川」、摂津峡方面から流れてきて高槻市を貫流する河川であるのは、言うまでもないが、同時に、古くから知られた、摂津国三島郡の歌枕でもあった。（続）

近年はオーロラ見物でアイスランドへのパッキングツアーがあるようだが、十年前前は観光旅行はおろか商売でもアイスランドで日本人の姿を見かけることはほとんどなかった。ブリジストン

タイヤの代理店が同国にあったので私は五年間で六回、アイスランドへ出張した。アイスランドへは英国経由、飛行機で約六時間で到着する。総人口三万人首都レイキャビクの人口は八万人と世界的にみても小国であるが、独自の言語を持つ。国全体が溶岩でできているような感じで度々火山の大爆発がおこり、そのたびに火山灰が欧州全体に飛び、気候に多大の影響がある。大きなアルミ工場以外はたいした産業はなく大半は漁業に依存しているが、人口が少ないだけに国民一人あたりのGNP（当時で三万ドル強、現在でも四万ドル）は世界一とのことであった。夏は日照時間が長く、深夜十二時でも太陽が沈まず、人々が乗馬などを楽しんでる光景がみられた。その代わり冬は朝一〇時になっても明るくならず、夕方は四時頃から暗くなる。

確か水曜日だったと思うが、ウイド

ウパーティと称して人々がホテルに集まり、一晚中飲んで踊って騒ぐ習慣があった。私もパーティーに参加したことがある。アイスランドは小国にもかかわらず、ミスユニバースを二回も出した美人国で、パーティーにもスタイル抜群の若い女性が沢山きていた。フリー

で来るのが原則なのでこちらから話しかければいいのだが、当時は日本人はおろかアジア系もいない白人社会で、

気後れがして話しかけることもできず一人で飲んでいた。すると一人の男性

が話しかけてきた。どうも日本人に興味があるらしく日本のことをいろいろ

聞かれて適当に答えているうちに「自分の家へきてナイトキャップをやらな

いか」という。朝の二時ごろでもあり

最初は断わったが、気の良さそうな人

だったので、少しだけということで行った。夜中なので良くは見えな

かったがかなり大きな家で居間だけでも二十坪くらいはあったと思う。夜中

でも暖炉がついていて、奥さんができて酒とサラミなどを出してくれて恐

縮したのを覚えている。翌日、代理店のヨハンセン氏にそのことを話した

ら、アイスランド人は人なつっこいのでよくあることだと言っていた。

ところで商売の方はというと、欧州の名だたるメーカーであるミシュラン

コンチネンタルなどもさすがにアイスラ

ンドまでは力を入れておらず、ブリジ

トンが市場占有率六十％でトップであつた。理由は欧州の他の国では気候的な理

由で夏タイヤ七十、冬タイヤ三十の比率

で売っていたが、アイスランドは極寒の

地で冬タイヤの比率が七十を占めてい

て、欧州メーカーは現地の需要にタイム

リーに対応できなかった。これに対し、

ブリジストンは現地に在庫を持ち、それ

も委託販売方式で売っていた。つまり代

理店は売れた分だけ金を払えば良いので

資金負担もなく売りやすかつたのだと思

う。ちなみにドイツでは地場メーカーが

圧倒的に強く、ブリジストンのシェアは

五％以下であった。フランスにいたって

ミシュランの牙城で代理店すらなく、日

本からの輸出はゼロであった。

ところで三年前のリーマンショックで

アイスランドは国が破産状態となりIM

Fに資金援助を要請していると聞いた。

理由はアイスランドの銀行がこぞって外

貨建てのローンを組んでいたのだが、ア

イスランド通貨の大幅下落で、英国・オ

ランダなどの外国銀行に返せなくなった

ためと聞いた。アイスランド政府はすべ

ての銀行を国有化したのが危機はまだ去っ

ていないという。私の記憶にあるアイス

ランド人は堅実で質素な国民であるが、

時代とともに国民気質も変わってしまったのだろうか。

自分を見つめ直す

「これからは、本当に自分らしい生き方を、好きなようにやってみよう」という決意を固めるのだが。

だれでも、若いころに比べれば、気力、体力、財力すべてにおいてパウダウンしてくる。これが自然だと思う。

「これから先を考えると不安で」「何をやっても満足感がなくて」「家の中の不要なものを少しずつ捨てているが」

「お互いに話し合うのだが」「それがなかなか、出来なくて」まだ、これ使える。捨ててはダメ」もとのさやに納めて満足。

これでは「要注意」ものを手放すこと、捨てることは、それまでの自分の生き方を見直し、本当に必要なもの、大事なもののだけ。

これが自分に必要な生き方の「たな卸し」とも言えるだろう。

心に通じる言葉

一年振りに知人に出会った一言。「元気なこと。わたしは、この通り腰が痛くて、ここまで来るのが大変だったのよ」という。
彼女にしてみれば、精一杯に丁寧な言葉で言ったつもり。ところが、

声をかけられた相手は、「まだ、用事がありますんで」と振り向きもしないで別れる。言葉は生きもの。使いなれた言葉には、歴史や文化がある。

人の心に通じる言葉を知るためには、その人の人生を知っているはず。「久しぶりやねえ。元気でしたか。ちょっと、そこらでお茶でも飲んでゆっくり話をしましょうか」

てな気持ちにもなれない。「ミーティング」ではなく、「寄り合い」時には、センチではなく、今までの生きてきた時代や背景も考えて、さりげなく言う。これは難しいこと。

質の高い生活をしているから、質のよい教育を受けたから、すぐ出来るというものでもない。歴史や教養じゃない。経験したことは、決して無駄にはならない。

俳句

土田 裕

○ 秋祭り半被の子等の数珠つなぎ

○ 朝露も共に洗ひて自家野菜

○ 空をける太極拳や秋高し

○ したたかに今日も秋蚊にさされけり

○ 戦いの終息の地やあきつ飛ぶ(中国、水師營にて)

○ 原発の除染地区の子等運動会

晶男

○ 原発の除染地区の子等運動会

兄

私は若い時に車の運転を止めた。「事故で人を怪我させては大変だ」と痛感したからである。

二十七歳の時だった。大阪の堺筋本町の交差点で、横から車線変更してきた車と接触した。ドアをこすっただけで、大いしたことはない事故だった。

しかし、車を運転していた相手に驚いた。脚の悪い人で松葉杖をつけて出て来たのである。

その人は運転席から出てくるとすぐ「どうも、すみません」と頭を下げた。この低姿勢にも驚いた。「事故では先に自分から非を認めてはいけない」というのが『常識』だからだ。

相手に素直に出られると、こちらも素直になる。「いえいえ、こちらこそ」

私もすぐに謝った。その後の事故処理は、スムーズだった。ごたごたせず和やかなうちに示談した。

その出来事は、私の心に焼き付いた。脚の不自由な兄のことを思わずにはいられなかった。

「選りに選って脚の悪い人とぶつかるとは。あれは兄が教えてくれたのではないか。いつか私が人を傷つけることを」その思いは徐々に膨らんだ。そして運転から遠ざかった。免許の更新さえ忘れ、気付いた時は期限切れになっていた。

以来、三十五年になる。なんら不自由はない。どうしても車が必要な時は、タクシーを使う。

車が誕生して百二十五年が経つ。しかし毎年、日本だけで五千人もの人が交通事故で亡くなっている。未だに『走る凶器』である。

車はもともと改良すべきだ。例えば最高時速は三十キロで車体がシリコンのように柔らかいもので包まれ、ぶつかっても人が怪我しない様な車にである。もちろん電池で走り、空気は汚さない。車が人に優しい乗り物になったら、また運転しようと思う。《龍》

『人気のデザイン』

好評につき
今月も続けます
☆
着物地にキルト綿をつけたコートやジャケットは軽くて暖かく手放せない1着になります

10月分は従来通りのお仕立て代で承ります
¥25,000~¥28,000

着物から服を仕立てます

梵~ぼん~

ゴマメの激しい歯ざしり

くナメるなよ、東電 その5く

●本当のほんとうのことを知りたい

私は間違っていたのかも知れない。福島の人たちを苦しめている東電を許せない。そう思っていたけれど、福島だけではないらしいのだ。放射能汚染で苦しんでいる人たちは。

もちろん、テレビのニュースなどで、東京・文京区のママさんたちが乳飲み児を抱いて、「ホットスポット（とくに放射線量の多い地域）」とか言われちゃうと、やっぱり心配ですねえ」と顔をくもらせているのを見たりして、関東圏の人たちが放射能汚染を懸念している、ぐらいのことは知っていた。福島周辺の県のみや肉や農産物の放射線量を測っては、出荷停止だ、出荷停止解除だと報道されているのも。だけど、知らなかった。千葉の住民が、自分たちの線量計で測ったら、極めて高い数値が出て、家を離れたりしているなんて。

この前、友達が「仕事の関係の知り合いが、千葉から大阪に引っ越して来てるんやけど、私のパソコンで、自分のメールを見させてもらえませんかかって言われてん。いま、部屋の大掃除してんねん」と言う。

友達の知り合い、ややこしいので「S

さん」と呼ぶことにするが、Sさんは長年、千葉に住んでいて、震災以後、家族と一緒に大阪で仮住まいをしているのだという。その理由が放射能汚染。

「Sさんが、自分でガイガーセンサーを買って、庭とか家のまわりを測ったら、すごい数字になってんて。あわてて、庭の草を刈って、砂や土をポリ袋に入れたりしたら、目がチカチカして、皮膚がピリピリするねんて。それで怖くなって、こんなところに子どもたちを住ませておくわけにはいかへんと思つて、大阪に引っ越して来たんやて」。

Sさんから直接、聞いている話なので、ウソはない。作り話もない。ただ、疑り深い私はこう聞かずにはいられない。「千葉？ ありえへんやろ。放射能で肌がピリピリしたり、目がチカチカするぐらいやったら、とっくにもっと問題になつてるんちゃうん？」。さらに「前に撒いた除草剤とかちやうんかな。放射能で、そんな症状が出るほどやったら、ものすごい被爆と違うのん？」。

私の友達も「まさか、千葉まで」と思う気持ちはあるのだが、それでも直接、Sさん自身から聞いているので、「マスクミの流している情報はウソばかりですよ、ってSさんは言うねん。放射能は浴び続けるより、ちよつとで

も、その場を離れて、身体から出すようにしたらいいらしくて、Sさんは毎日、歩いて汗をかくようにしてはるねんて」。

そのSさんが健康オタクで、神経過敏ということはないのかな？ ほら、心配や心配やと思つていると、「あ、やっぱり！」という事態になることつて、あるやん。自己暗示というんかな。そう友達に言つてみたが、友達は「そんな感じの人やない。だつて、千葉から身寄りもいへん大阪に引っ越すつて大変やもん。独身やつたら身軽かもしれへんけど、奥さんと子どもさんらも一緒やで。逆に、奥さんと子どもさんを危ない目に合わせられへん、いうことで、こつちでしばらく生活することにはつてんけど」

Sさんはフリーの仕事なので、移り住むことができたらしいが、パソコンのメールでさえ見ることができない。千葉の家はそのままなので、ときどき様子を見に戻らなければならぬ。千葉と大阪を往復する交通費から、こちらの住居費まで、何もかも非常事態らしい。でも、子どもの命、健康には変えられない、ということなのだそう。

Sさんの思い込みだけで、子どもたちを転校までさせるか？ 奥さんも同意しているのだから、ご近所一帯にそんな不安が広がっているのではないだろうか。Sさんの周囲の人たちは結構、みんな

線量計を買つて警戒しているそう

だ。それが千葉の話なのである。福島に隣接しているのは千葉ではなくて茨城。福島の第一原発は海岸線であらうど福島県の真ん中あたり。とくに茨城側に寄つてはるわけではない。

千葉で、本当に避難しなければならぬほどの放射線量があるとすれば、福島の北側の宮城、その先の岩手、青森も危険、ということになる。内陸側でいえば、新潟や山形も危険地域ということになる。

そんなことになったら、国中が大パニックになるから、国はだまつている。そういうことなのだろうか。まさか。



ありえへん。Sさんの過剰反応と信じたい。でも、本当のほんとうのことはわからない。

●給料はいままで通り？ ボーナスは出た？

Sさんが妻子を連れて、買ったばかりの家を無人にしてまで、大阪くんだりまで引越して来ているのは一体、誰のせいだ。東電、まずはアンタ方の責任と違うんかい？

補償じゃ何じゃというのが遅すぎる。事故の収束に全力をあげているって、一体、どの程度の全力なのだ？ 東電の社員は、何人が事故現場に応援に行ってるんだ？ それは社員の何割？

下請けの下請けの下請けの下請けさ。下請けの下請けの下請けの下請けさ。息もたえだえ、何キロもごっそり痩せるぐらい過酷な環境で作業をしているのに、一般社員も社長さんもバカ高い給料を貰って、快適な室温の中で、座り心地のよいイスにふんぞりかえって許されるとでも思っているんじゃないだろうな。

下層民のひがみが爆発している、と言ふならば言え。東電の社員の皆さん、この夏、いままで通り、ボーナス出たんですか？ 給料、いままで通り、貰ってるんですか？

それで、東電の電気代、1カ月10%アップですか？ ナメんなよ、東電！

(人間魚雷1号)

新連載

人間万事塞翁が馬①

片山義隆

■まさか！ 青天の霹靂

『人間万事塞翁が馬』これは中国の故事で、国境に住む老人の馬が逃げた事から始まる、幸・不幸の巡りあわせの話、平たく言えば人生で禍や幸福は予測のできないもの、表裏一体で何時不幸が来るか幸せが来るか分からないという事で、人生の戒めとして皆さんも座右の銘として用いられますが、私は5年前この故事を地で行く出来事があったので、今から述べたいと思う。

当時、私は某府県警の警察官であった。忘れもしない平成18年9月2日午後2時ごろ、愛車の125CCスクーターで意気揚々と買い物のため自宅を出た。

その後、おぼろげながら気が付いたのが2週間後だったろうか、病院のベッドの上で首から下が全く動かない自分の体の現実を知ることになった。

私は付き添っていた妻に「何で入院しとるんや、何で体が動けへんのや！」と尋ねると「家からバイクで出かけて直ぐ交通事故をして首の脊髄が損傷したんよ」と説明してくれたが、私には事故時の記憶やその後2週間の記憶が全く無く、何か狐につままれたような

変な気持であった。

交通事故当時の事は記憶にないので家族の伝聞を借りて話すと、家を出発して約1キロ、嬰兒を載せた若夫婦運転の軽四自動車に追従しながらT字路交差点を左折した途端、前の軽四自動車が急停車したのだ。私は家も無いところで止まるはずはないとノンビリ走っていたが、思いもよらぬ軽四自動車の行動に狼狽(びつくり)することですし急制動(急ブレーキ)をかけたが、左に転倒したのです。軽四自動車には傷も付かない程度に僅かに追突の交通事故になったのだ。

現場に来た警察官に所属署と名前を告げたあと意識が遠のいたそうので、救急車で近くの救急病院に搬送された。そんな中、自宅に電話のコールが鳴った！ 妻が受話器を取ると「K警察署です。ご主人が交通事故に遭われ・・・」と話す相手に最初は「これは今流行りの振り込め詐欺か？」と疑ったが「S病院に救急車で搬送されたので直ぐ行ってあげて下さい」との内容に半信半疑であったが、重篤な症状を告げられるとは露知らず軽い気持ちでS病院に向かった。

妻が病院待合室で待つこと数十分分、処置室からストレッチャーに横たわり出てくる私の姿があった、私は声を出す事も無く、妻を茫然と見ていた

そうだ。妻は一瞬「大丈夫やわ」と思ったが、直ぐ担当医師から呼び出され、診察室に入った。

医師がレントゲン写真を示しながら「ご主人は首の所で脊髄が損傷しています。当病院では治療できませんのでN病院に転送となります。」とのあまりにも衝撃的な言葉。「つい数十分前元気に家を出る夫を送り出したばかりなのに、そんな大怪我になるなんて」と信じられなかった。

救急隊員に促されて、救急車の後部に乗りし、首にギブスを巻きストレッチャーに横たわる私を目のあたりにして「これは本当なんだ」と自覚せねばならなかった。

■天国から地獄へ

私は19歳で警察官を拝命し、あまり出世欲も無かったが、自分の意に沿わない課へ異動となったため、そこから出たいとの思いから自分なりに受験勉強に励み34歳の時巡査部長に昇進したのであった。

以来出世欲も無く20年が過ぎたところで、55歳までには警部補に昇進しなくてはと一応の目標があり、54歳を迎え一念発起し自分なりに勉強を始めたが、しかし弊害があった。

それは50歳過ぎて現れた老眼、とにかく目が疲れる「何で40代の時に勉強して、なっとかんかったんやろ」と後悔した。30〜40代はジョギングに没頭し、50歳からは妻が独学で始めた和風ドール

ハウスの世界に足を踏み入れ没頭するのである。

趣味を一時中断して勉強始めたが、試験は予備試験(五者択一式)でふるいにかけてられ、一次試験(憲法、行政法、刑法、刑事訴訟法、実務の論文形式と課題論文)で更にふるいにかけてられ、最終の二次試験(面接、実技)となる。

久しぶりの仕事を除く徹夜での猛勉強であるが、一次試験は一問概ね、わら半紙2枚埋まる位書くが、私は大学ノート数冊に書きまくり覚えるが、その甲斐あり、8月末日合格通知をもらったのであった。

上司から宴の席を設けていただき祝辞もいただいて、決意も新たにしたいその翌日の事である。

ほっとして気の緩みもあったのだらうか、しばらく中断していた妻とのコラボの作品の材料仕入れに出かけ今回の事故を起こすのであるが、私も巡査部長時代、交通戦争と言われるところで数年班長として交通事故捜査に携わってきたが、こんな軽微な交通事故で重篤な脊髄損傷になるような事例はなかった。

本当に不運としか言いようが無い。さて話を戻すと、妻は救急車に乗るのは初めてであるが、サイレンの音を聞きながらノンストップで緊急走行する車内、決して楽な乗り心地ではなかつたが、今まで見たことも無い「首が痛い!痛い!」と叫ぶ私の姿を見ながら、今後の事を考える余裕も無く車に揺られること30分、N病院に到着した。

■ 深刻な脳障害

N病院の整形外科病棟の個室に入院することになるのであるが、私の脳は随液かなにかで圧迫されたことから、脳に障害をきたしていた。

症状は、記憶障害、今聞いたことを直ぐに忘れ同じことを何回も聞き返す、例をあげれば看護に交代で来てくれる妻や娘に「何でこんな事になったんや」と聞く「交通事故で首の脊髄が損傷したんやで」との説明に毎回初めて聞くように「エーッ!」とびつくりする、毎日エンドレステープのように延々と繰り返されたらと聞く、答える方も大変だったろう。次に自制心が無くなり、我慢が出来なくなるのである。

首に付けてあるギブスと鼻に付けてある酸素吸入チューブがいやだったらしく、看護師を頻繁に呼び出し「取ってほしい」と懇願すると「片山さんこれは怪我を治すため必要やから取れません」との説明に納得するも、直ぐに忘れまた呼び出し懇願する。とうとう呼んでも無視されて来てくれなくなった。家族にも「取ってくれ」と懇願するも、無視されると「取るどー!取るどー!」と叫ぶが、全く動かない手で取れるはずもなく、家族にすれば「取れるんやつたらとってみ」と可笑しかっただろう。

その次に夢と現実がごちゃ混ぜになる。例えば、妻に「どこでも行ける切符買ってきてくれ」と頼むと、当然「そんな切符売ってる訳ないやないの」と説明するも「絶対売ってるから買ってきてくれ」と駄々っ子の様に言ってきたので、妻は病室を出て売店で時間をつぶし戻るともうそのことは忘れていた。

退院後に、妻が携帯電話に録音した会話を聞かせてくれた。スピーカーから「高速の絵筆買ってきて」と訳のわからぬ事を言う私の声、「そんな物どこに売ってるの」と妻の声、「売ってるから頼むわ」と無理を言っている内容に、本当にこれが自分なのかと驚いた。

しかし、どんな発想でこんな事を言ったのか? 絵を描くのが好きなので、手の不自由を補ってくれスーツと書けるとでも思ったのか、まるでドラえもんの四次元ポケットである。

以前と変わらない時もある、それは見舞いの人が来ると、まともに会話する。家族も「あれ、どうもない、治った」と安心したのもつかの間、見舞い

の人が帰ると豹変し無理がはじまる。当然来た人や会話内容は直ぐに忘れてしまっている。ま、こんな深刻な脳障害が起きたのであるが、ここまで重症ではないと思うが脳梗塞で倒れた人に多い症状と聞く。

編集後記

先月号でご紹介しました戸田巽さんの報告会が十月二日に大阪ヒルトンホテルで開催されました。当日は百人を超える方々が遠くは秋田や関東からも来られ大変盛況でした。

「ちちんぷいぷい」で放映されたビデオや、多くのサポーターが同行され励まされているスライドなど、三時間余り楽しませて頂きました。戸田さんは自分の思いつきで一匹狼のように何も考えずに歩いてきたが、今回いろいろな人から手紙やメールを頂いたり、サポートしてもらって「独りでは何も出来ない。皆さんの助けがあればこそ出来るのだ。」と改めて思った」と言われました。

今回、初めて片山さんに投稿して頂きました。突然襲った事故を冷静に書かれた文を読むと、誰にでも起こりえる日常生活に潜む怖さを感じました。自戒したいものです。

紙面の都合で「負けるな!よっちゃん」は次号に掲載します。(嘉)